

# 子どもの本

## 研究会



35周年

子どもにおはなしを  
本のたのしみを!

### 【私の一冊】

### 『花咲きたぬき』

川村たかし／さく 山中冬児／え  
(小峰書店、一九八七)

三宅 興子

三十年ほど前のことです。梅花女子大学に新設の児童文学科ができ、赴任してきたわたしは、川村たかし先生と同僚になりました。『最後のクジラ舟』や『新十津川物語』全十巻など、大きいスケールの作品で知られている作家です。ある日、その川村先生がひよいと研究室にいらして、ちよつと恥ずかし気に『花咲きたぬき』をくださいました。わたしは、その場で読み始めました。すぐに読めました。「5、6さいむき」の幼年文学だったのです。

それ以後、毎年、春が待ちどおしい候になると読みたくなる不思議な愛読書になりました。物語は、嵐の一夜が明けて、白いモクレンの花が何も無い枝の先に、ぽつと火を灯すところから始まります。そのモクレンの木の下で、寝坊のたぬきが長靴にばけて昼寝をしています。その家のユカちゃんのもとへ友だちのカコちゃんが出てきて、庭でままごとをするのですが、そのメニューがタヌキ汁。タヌキ釣りをする二人に捕らえられて、次々に姿を変えて庭中を逃げるタヌキと追いかけるユカちゃんたちの攻防がなんともほけていておかしいのです。読むほどに、やつと春がきたあたりの様子が、美しく明るく表現されていて、暖かい空気に包まれてしまいます。幼い子どもにもわかる川村先生の文章表現の素晴らしさは特筆ものなのです。

このお話のような「昼寝をするためきとままごと遊びに没頭する女の子」の情景は、昔話になってしまいました。物語の原風景としても次世代に継承して行ってほしいと感じています。一九六〇年代から八〇年代にかけて、幼年文学というジャンルができ、新しい読者として「幼年」の発見がありました。さまざまの作家が、力量のある画家と組んで、それまでになかった作品を生み出されてきました。『花咲きたぬき』は、ほんの一例にすぎません。

原稿を書きながら、子どもともにいるいろいろの作品を読み合ってきた方々と、「次世代に残したい幼年文学リスト」が作りたくなってきました。本を山と積んで、幼年文学の再読に耽る日々を夢見る早春のわたしです。

(梅花女子大学名誉教授)

